

椿一郎 三歌集 高山邦男

『椿一郎 三歌集』が刊行された。いわゆる復刻版である。かねてから椿の歌集を探していたが、手に出来ていたのは『且つ耕し且つ歌ふ』だけだった。貴重な復刻でこれを機に広く知られ研究されるようになればいいと思う。椿一郎は明治二十九年生まれで生涯、農業を生業として暮らした人である。「心の花」の先輩歌人で、この機会にこの歌集の意義について考えてみたい。

椿一郎は歌壇の有名人ではないが、佐佐木信綱がとても大切にしていた歌人だった。「心の花」二〇一二年九月号の「ほろ酔いインタビュー」にその辺りの事情が語られているので興味のある方は参照して欲しい。佐佐木幸綱の話では「職業を持つている人の歌を大事にしる。高等遊民の文学青年の歌ばかりではなく、地に足の着いた生活者の歌を大事にしる」と信綱は言っていたそうで、職業を歌う椿を「おのがじし」を体現している歌人として評価していたのだと思う。また、この本に掲載されている信綱の文章を読むと田園歌人という括りで考えていたようである。例えば、「梅雨晴の風におよげる隠豆の蔓はいかにも手をほしげなり」について「梅雨晴の畑に出て先づ眼についたのは隠豆の蔓であつた。のびのびと五月の風におよぐ隠豆の蔓を眼前に見るが如く、一読心も爽やかなる歌である」と評する。確かに信綱が指摘したような牧歌的な魅力がある歌いぶりなのだが、現在の眼から見るとまた違った価値が見えてくる。

・今日の暑さ堪へ難けれや清水湧く小田の山根に鰯つどへり
・茸狩かへり来し子が笹の中に茸はなくてあけびと野栗

『且つ耕し且つ歌ふ』

今はもう失われてしまった農作業や里山の姿、自然の美しさが生き生きと描かれていて魅力的である。そして、とにかくよく働く人で「働く」＝「生活」という力強い作品に圧倒される。

・水汲みて耕す閑田うれしもよ今年も鮎をあまた得にけり

・雪ぐもり風吹き出でて寒ければ頬かむりして妻と麦踏む

・米売れど生活苦しき農夫吾蚕飼ひ豚飼ひ鶏を飼ふ

『農人の歌』

・米俵重ねし土間ゆ身をすばめ出入りするなり心楽しく

『且つ耕し且つ歌ふ』

ここでは全てを挙げられないが、稲作の他、畑では白菜、里芋、蕎麦を始めとして様々な野菜を作り、蚕や鶏や馬を飼い、柿等を育て、窯で炭を焼く。

・供木を御国のためになし得る幸此の我が幸をみ祖に感謝す

『且つ耕し且つ歌ふ』

・買ふ人の身を思ひつつ定貫ゆ余分に入れぬ吾が売る炭は

『藪蔭の花』

戦争の影が色濃くなってきた時期の作品で、ナショナリズムではない愛国心があり、時代を生々しく感じさせる力がある。また、次のような作品を読めることも楽しく最後に挙げておきたい。

・馬に乗り畑に行きたる幸綱君嬉しがりつつ降りんとはせぬ

・げいろ捕つてと孫がせがめど幸綱君せぬらしくてどれどれと
『藪蔭の花』